

## 【調査報告】

### 阿南市桑野町浦ノ内の祭礼

高嶋 賢二

二〇〇二年（平成一四）一月四日に実見・調査する機会を得た徳島県阿南市桑野町浦ノ内の祭礼について報告する。

浦ノ内は桑野町内の花井・山田・西谷・原田・花坂・尾花からなる地区（ホウジ）の名称で、戸数は六二戸。氏神社は地元の鳥取山の山頂にある羽落神社（チヨウトリサンと呼ばれる。祭日一月二・三日）と、その麓の杉尾神社（祭日一月三・四日）で、一月二・三日は両社の祭礼が続くことになる。地区内を上・東・西谷・西中の四つの当家に分けており、祭礼に際してはこの各当家の区域が毎年輪番で、ホントウヤ（本年は西中当家、以下同じ）・ミコシトウヤ（西谷）・シシのトウヤ（上）・ナリモノトウヤ（東）の四つのトウヤ（役職）を分担する。

ただしミコシトウヤ・シシのトウヤ・ナリモノトウヤがいずれも神輿の担ぎ手・獅子舞・ヒヨウシ（ダンジリの囃子）と、祭礼の執行に関わる役のみを担っているのに対し、ホントウヤがあたった年は、その引き継ぎを行う毎年三月末頃の日曜日（以前は旧正月だった）に開かれるソウカイ（総会）で、あたった区域（当家）内で長となる者（これもホントウヤまたは

オオトウヤなどと呼ばれる）を選出し、共済組合の評価委員・農業関係の実行組長・農協婦人部・婦人会役員などの社会生活に関わる役員も決められるほか、秋祭りだけでなく、元旦の羽落神社での新年互礼会、六月第一日曜日の地区を挙げて外出などする慰安会、夏の地区内の有志の集まりである浦ノ内若連会（通常セーネンダンと呼ばれる）と共に出店や余興などを開く子供まつり、地神さん・山の神さん・ソウソウゴンゲン・出雲さん・愛宕さん・八坂神社・ジャガミさんなど地域内の小祠のコマツリなど、年間を通じて様々な行事を行なうことになる。

なお、地区内の冠婚葬祭・新築祝いなどは、地理的な区分である前述の当家とは別に、ほぼ同姓の人々で構成される芳川組・鎌田組・湯浅組・井坂組の四つのコウグミ（講組）で対応するようで、分布的には混在している。親戚筋に不幸があつて祭礼に出られなくなることを避けるという。ちなみに旦那寺は万福寺（桑野町岡元、真言宗）。

さて祭礼は、羽落神社ではヨイミヤ（二日夜）にとくに行事はなく、ホンミヤ（三日昼）で神事の後獅子舞を演じ神輿が社殿を一周して終わるに  
対し、杉尾神社ではヨイミヤ（三日夜）に相撲が開かれ、ホンミヤ（四日

屋)では獅子舞とともにダンジリが出て地区内を巡行するネリが行なわれるなど大いに賑わう。なお一九五五年(昭和三〇)ころまでは桑野町全体の氏神社であった天神社(桑野町鳥居前)の祭祀にも出ており、岡元・中野・川西・谷・皇子・中富・内原などのダンジリが出揃う中で、浦ノ内のダンジリが境内の中央に置かれという。

私が見た杉尾神社のホンミヤについて追っていくと、まず昼一二時半頃より人々が集まってこの日の準備が進められる。やや高所にある杉尾神社の石段を降りた広場に浦ノ内集会所(前述のソウカイや獅子舞・ヒョウシの練習はここで行なわれる)横の倉庫からダンジリ等の諸道具が出される。

一三時五〇分ごろから石段上の本殿で神事が行なわれた後、一四時一五分、渡御の一行が降りてくる。先頭はサルタヒコ(天狗面着用)、以下三方に載った野菜・乾物・魚等の供物が七つ―神職―御幣三本―幟八本―神輿で、かつてはサルタヒコの後にアカオニ・アオオニという仮面の者二人がいて、太い棒の端に剣型の鉄板を付けた鉾状のものを振りかざし、サルタヒコとともに露払い役を務めたという。

一行はそのまま広場を横切り、鳥居を抜けて、かつてその先にあった“お旅所”へ向かうが、お旅所だった場所は現在県道二四号羽ノ浦福井線が通っており、実際は県道に出てすぐ鳥居まで引き返し、そこで神事を行なった(一四時二〇分)。

神事終了後、広場で獅子舞が行なわれ、それが終わると神輿とダンジリそれぞれが地区内を巡行するネリを始めるべく道路上へ繰り出すが、出発直前に煙火が何発も打たれる(一五時頃)。祭礼期間中は朝に昼に夕に時報の如く幾度も煙火は打たれたが、この時打たれるのは近隣の商店などが出

資し、空中で爆発後パラシュートや商店名入りの旗をなびかせて落ちて来る豪華な物で、打つのは専門の業者である。子供らはその燃え殻である半球状のワンコツを競って拾い集め、縁起物のように各戸の戸口などに掛け飾っている(このワンコツが珍重される風は阿南市内の他所にも多く見られる)。煙火が終わるとあらためてネリは出発した。

ネリの間、ダンジリ内からは太鼓と鉦だけの囃子が子供らによって囃され、途中希望した家の前で止まって何回か接待を受ける。お酒も振舞われ行く先々で盛り上がる。現在ダンジリは太鼓と鉦しか載せずに巡行するが、かつては出発直前に舞った獅子頭を正面に据え、小鼓・大鼓・小太鼓なども積載して、家々や小祠ごとに止まってヒョウシを打ったといい、一日がかりだったという。なおダンジリと同行しないがこの時神輿も、「ちよーさじやー」の掛け声を繰り返して、別に地区内を巡行していた。

ひととおりネリが終わわり、神輿・ダンジリともに杉尾神社に帰ってくる。祭礼はほぼ終了(一七時頃)、各々慌しく片付けに入るが、最後の締めくくりに、石段下で子供らのヒョウシが打たれる。本年の場合太鼓(鉦留め太鼓一つ。撥二本で打つ)は小学六年生二名(演奏は交替で)、小鼓(二つ。片手に持ち素手で打つ)は五年生二人、大鼓(一つ。片手に持ち細い竹の撥一本で打つ)は四年生一人、小太鼓(締め太鼓二つ。撥二本で打つ)は三年生二人で、鉦は二年生がいないので一年生一人が担当した。周囲で見守る大人たちの掛け声ともあわせ、ヒョウシを七回、センギリ(千切)を三回打って無事祭りは終了した。

ところで、浦ノ内の獅子舞は、一九九六年(平成八)五月、阿南市の無形民俗文化財に指定されている。現在のその運営は浦ノ内獅子舞保存会(前述の浦ノ内若連会にほぼ重複)で、シシのトウヤはそのサポートを担う。

獅子舞じたいの内容は、寝ている獅子を唐子役の子供が起こし、最後に独特のイセブシ（伊勢音頭の変形）で舞うというもので、周囲の観客が獅子を取り囲むように注連縄を張り巡らせ、舞い終えると同時に（現在は舞い始めた直後）注連縄を切り、その縄をワンコツ同様各戸に持ち帰って飾るという大変興味深い内容を有している。とくにその獅子の風貌、獅子頭の構造なども極めて特殊で、特筆すべき内容が多い。その成立に関する考察も含め、さらに精査をすすめ機会を改めて発表の場を持ちたい。本稿はその予備調査の一端である。

（千七九六—〇三〇— 愛媛県西宇和郡伊方町湊浦八八〇）